

福士 勝衛（ふくし・かつえい）

1、プロフィール

劇作家。演出家。青森美術会会員。日本大学美術科在学中築地小劇場で演劇活動に参加。健康を害して帰青。戦後劇団「新興舞台」を再建、主宰。「地方演劇」創刊。

<生没>

1916(大正5)年8月29日 ~ 1980(昭和55)年1月10日

<代表作>

戯曲「鞆々の風」「メレオン島の悲劇」「おんじかすたち」、
創作「肉刺」「尻青き豚』『福士勝衛選集』

<青森との関わり>

軍人であった父の任地宇都宮市で生まれたが、小学六年の頃一家をあげて青森に帰郷。葛西善蔵を愛読、母の読書好きの影響も受ける。

2、作家解説

福士勝衛は大正5年8月29日、宇都宮市塙田450番地で福士武之助、フミの長男として生まれた。福士家は青森県黒石藩士で平内を所領としていた家柄であったが、武之助は当時陸軍大尉、第14師団歩兵第66連隊中隊長として勤務していた。フミは弘前市鷹匠町の出身。2人の姉がおり、待望の男子誕生ということで大切に育てられた。勝衛は姉達の中でおとなしい少年であった。大正5年4月父の転勤で栃木県女子師範附属小学校に入学、その後新潟県高崎市立南小学校に転校、野球好きの小学4年生になっていた。昭和2年4月、軍縮により退役となり、祖父以来の居住地である青森市浦町字奥野に一家を挙げて帰郷。勝衛は青森県立女子師範学校附属小学校6年に転校する。4年4月県立青森中学校に入学、1年と2年の間に身長が30センチも伸び家族を驚かせた。母の読書好きに影響されて文学に傾倒、とくに葛西善蔵の作品を愛読した。9年拓殖大学ロシア

語科に入学、ラグビー選手として活躍。小説「黄壁の戯画」(30 枚)ほかを書く。10 年、日本大学芸術科に入学、演劇科に在籍、築地小劇場での演劇活動に参加。「化石の森」「キュリー夫人」などに出演。青森では第一次新興舞台公演「国境の夜」に出演、傍ら小説や戯曲の執筆を始める。日中戦争で弾圧が激化し、新劇運動壊滅状態のさなか戯曲「ベーベルさま或る滑走路」「底流」などを書く。16 年健康を害して帰青。その後の人生の大半を闘病生活に費す。21 年小康の時が訪れ、「新興舞台」を再建、「メレオン島の悲劇」一幕(50 枚)を市内蓮華寺、造船所、黒石劇場などで演出公演、22 年新興舞台団員の野呂リツと結婚。ラジオドラマの分野でも活躍、24 年「新興舞台」解散、病気悪化、青森美術会に入会。33 年志摩三平らと「地方演劇」を創刊、伏石克平のペンネームで「人生方程式ーあるムイシュキンの挿話ー」を発表。昭和 55 年 1 月 10 日久栗坂国立病院で肺結核にて死去。享年 65。没後『福士勝衛選集』が同刊行委員会から発行された。

3、資料紹介

○『福士勝衛選集』

図書

1983(昭和 58)年 2 月 28 日

185mm × 128mm

病苦の人生をエネルギーに生き抜いた福士勝衛の代表作が収められている。「肉刺(まめ)」を含む 4 篇の創作、戯曲「鞆々の風」ほか合わせて 3 篇と年譜。選集刊行委員会 8 名(代表福士リツ)。妻リツと長女真知子、青森美術会の相馬清が一文を寄せている。

○「マキシム、ゴーリキー誕生八十五周年記念 どん底 4 幕」

プログラム

1954(昭和 29)年 9 月 11 日

173mm × 185mm

新興舞台での「どん底」初演は昭和 21 年であったが、これは青森市教員組合、芝居愛好会、市役所演劇部の後援により、劇団新興舞台第 11 回発表会として

県立図書館ホールで公演された。福士勝衛は病い悪化、時代考証として参加している。